



作・絵：かわまた

X(旧Twitter)でふりかえる 高尾山ニュース！

高尾ビジターセンターのX(旧Twitter)・Facebookをチェックしていただいているみなさま、いつもご覧いただきありがとうございます！
 山頂の気温や天気、旬な自然情報などを毎日発信しています。
 2023年10月～12月の間のツイートから、注目のニュースをご紹介します。



高尾ビジターセンター【公式】

天気：晴 気温：17.0℃ 富士山展望：○

#カントウカンアオイ が花盛り！

花は、大きな葉っぱの下に隠れていることが多いので、手で優しくペロンとめくって、観察してみてくださいね♪

#高尾山 #高尾ビジターセンター



午前9:44・2023年11月3日・5,878 件の表示

こちらの写真は1号路の女坂で観察したカントウカンアオイです。葉の下に花が咲いて隠れているなんて、不思議な植物ですよ。みなさんもぜひ、冬の花観察として探してみてはいかがでしょうか？

解説員

こらむ

vol.36

植物観察のススメ(冬)

高尾山には毎年、季節の花を目当てに多くの方が登ります。そのため、花の時期になると「あの花はどこにありますか？」や「この花は何という名前ですか？」など、窓口や電話での問い合わせが多くなります。

冬はどうでしょうか。晩秋から冬にかけては「この時期は(花が)何もないね」とよく聞くようになります。しかし、本当に「何もない」のでしょうか？華やかなツバキやサザンカが咲いていた、カントウカンアオイの花は自らの葉の下に隠れて静かに咲いています。とはいえ、咲いている花は絶対的に少ないです。

そんな花の少ない冬でも、ぜひオススメしたい植物の観察ポイントがあります。それは、実や種です。この時期、色とりどりの実や種が、動物や鳥たちのみならず、私たちも魅了しています。例えば、青いジャノヒゲの実や赤いイイギリの実、紫のムラサキシキブの実などがあります。

高尾山では植物の種類が多く、多種多様な植物の一生を観察することができます。実や種、春まで待って芽生えまで見ていると観察の幅が広がり、どの季節であっても山登りを一層楽しいものにしてくれますよ。

〈解説員 いしかわ〉

高尾山山頂から発信！

のぶすま

 「のぶすま」とは
 ムササビの古い呼び名です。

 vol. **74** 季刊
 2024 年 冬号

カンアオイの仲間 観察のススメ

冬から春にかけてひっそりと花を咲かせるカンアオイの仲間。この時期の花観察としてファンが多いのですが、葉の下に花が隠れているため、気付かずに通り過ぎてしまうことも…。本号では、高尾山周辺で記録のあるカンアオイの仲間4種の魅力についてたっぷりご紹介します。

昭和6年
牧野富太郎博士が
発見地に因んで命名

タマノカンアオイ(多摩の寒葵)

他の種より
花が大きい！

花期：3～4月

花の香り：ほんのり甘い独特な香り

東京都レッドデータブック：絶滅危惧I類指定



ランヨウアオイ(乱葉葵)

花期：3～5月

花の香り：長期間漬け込んだたくわんの香り

東京都レッドデータブック：絶滅危惧I類指定


 カンアオイ(寒葵)
 別名：カントウカンアオイ

花期：10～2月

花の香り：香りはなし



フタバアオイ(双葉葵)

花期：3～5月

花の香り：香りはなし

「この紋所が目に入らぬか！」
でおなじみの徳川家紋の
モチーフです

※どの種も香りはごくわずか(スタッフ調べ)

【のろのろカンアオイの仲間の分布拡大速度】

カンアオイの仲間の特徴に、異常に遅い分布拡大速度があります。植物の分布拡大方法は様々で、カエデの種のように風に飛ばされるもの、センダングサのようにトゲをもって動物にくっついて移動するものなどがあります。しかし、カンアオイの仲間は、アリの種を運ばせたり、豪雨などで土が移動することによって分布を広げるため、他の植物に比べ分布拡大速度が異常に遅いことがわかっています。

1年間で広がる距離：約10cm！

1万年に数kmほどしか広がらないと考えると・・・



なかなか新天地に到達できないカンアオイ。そんなカンアオイが高尾山に4種類も自生しているなんて、すごいですよね！

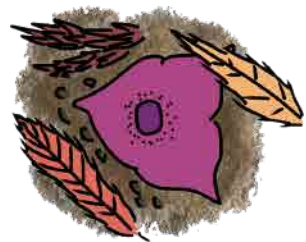
さらに！ 分布を広げる能力が低い主な3つの要因

①発芽から開花まで約10年



発芽から開花まで約10年と成長が遅い

②落ち葉に埋もれて咲く花



花が落ち葉に埋もれるようにして咲くため種子が分散しにくい

③少ないタネ

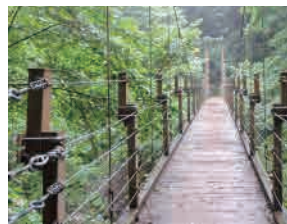


年ごとに付ける種子の量が極めて少ない
(1つの花あたり数十個程度)

【過去には4号路で盗掘も・・・】

「4号路の吊り橋の先のところには、かなりタマノカンアオイが見られるところがあった。そして、ここにタマノカンアオイの絵がかかれた説明板が立てられた。なんとなく心配だったが、案のじよう、数年のうちにここから、ほとんど姿を消してしまった。心ない人たちに持っていかれてしまったのである。」

～ 書籍「1988年刊行 ザ・高尾！ 花と木の随想」著書：菱山忠三郎より抜粋～



【まとめ】



一度、消えてしまうとその場所では見られなくなり、もし種が落ちていたとしても新しい株が出るまで途方もない時間がかかってしまいます。人が関わることで自然が保たれてきた高尾山。人が関わることで自然に与える負荷を減らして、今後も末永く見続けていきたいですね。

約1年間、高尾山周辺でカンアオイの仲間を観察してきました。局所的な分布と遅すぎる分布拡大速度を考えると消滅していてもおかしくないこの植物が、今も高尾山で4種類も見られることは、決して当たり前のことではありません。これまで繋いできたカンアオイの命のバトンをこの先も見続けられる高尾山であり続けたいですね。

〈解説員 おざき〉

高尾山山頂の風景

前号（のぶすまVol.73秋号）の自然コーナーで、高尾山の山頂周辺では多くの哺乳類が活動していることを紹介しました。ビジターセンターにいてくことで気付いたこの山頂の風景は、「明治の森高尾国定公園」が目指したものであり、高尾山ならではの風景でした。

山頂で目撃する哺乳類の最も多い行動は、採食です。山頂にある多くの植物を利用しており、食に関わる資源が豊富なことが、彼らにとって山頂が魅力的な場所になっているように感じます。

そんな山頂周辺の植物（特に樹木）に注目してみると、山頂はクスギやコナラなど雑木林のような様相で、周辺（5号路）の北側に「江川杉」などの人工林、南側にモミヤカシ類など様々な植物が入り混じる天然林になっていることが分かります。昔からこのような景観であつたわけではありません。

大正元年発行の「高尾大観」という書籍に、「大見晴」として、山頂の記述があります。

『高尾の風景は見晴にあり。山嶺突角展望の美あらざるなし。最も頂上なるを大見晴といふ。（中略）山は饅頭の形をなして峙立し、木一本もなし。四顧凡て薄なり。こゝを十二國見晴臺とも稱す。（中略）高尾山は全體に樹木茂れり。故に低小なる山に似合はず。水あり。瀧あり。深山幽谷の小規模を有す。されどその樹立のこゝに及ぶるこそうれしけれ。（中略）山にたつとふべきは絶頂なり。絶頂に展望なくば登山者をして失望せしむること如何ばかりかぞや。』

また、昭和42年に明治の森高尾国定公園に指定されたことが、山頂の景観が変わった要因の一つに挙げられます。山内の自然保護と利用の観点での整備が行われ、樹木に関しては従来の経済林としてではなく風致林として管理されるようになりました。山頂には見晴台が整備され、登山者が山の斜面に立ち入れないよう柵が設けられました。人の踏み込みが制限されたことで、ススキばかりであつた山頂に様々な植物が広がったのです。山頂に植えられた樹木と広がった天然林、スギ・ヒノキなどの人工林が大きく生育したことで、哺乳類たちにとって魅力的な現在の環境が出来上がったのではないのでしょうか。

眺望を楽しむだけではなく今の山頂は、自然公園を作ってきた先人の狙いであり、目指していた姿なのかもしれません。自然公園としての高尾山の歴史や山頂にビジターセンターが開設され自然解説を行ってきた意味を改めて考えることになった発見でした。



↑5号路から山頂までの斜面を登る1980年代の風景

〈解説員 やまもと〉

※今現在は植栽はせず、元々の植生を大切にす方針がとられています。

この美しい黄緑色の物体は、ウスダビガという大きなガの仲間の繭です。繭の主は11月頃に成虫の姿で繭から出ていきます。山内の色がめつきり減るこの季節に、宝探しの感覚でウスダビガの繭を探してみたいかがでしょうか。

35mmほど



落葉した木の枝に、ぶら下がっています

ウスダビガの繭

樹上の宝石

ちおし

vol.32

解説員の

〈解説員 こばやし〉